

山形の旅 2018



2018年3月

旅のチカラ研究所 植木圭二

2018年早春の山形に3泊4日に行ってきた。宿泊は蔵王温泉の会社の保養所で、この宿は毎年連泊をして温泉を楽しんできたが、どうやら今年が最後になりそうなので雪の残る山形、蔵王を訪ねることになった。

第一章 グルメと歴史の土地

■米沢牛は旨い

私たち家族が乗った車は東北自動車を北上して米沢駅前に止まっている。乗っているのは私と妻と息子とその嫁というメンバーだ。私がかつて勤めていた会社の蔵王温泉の保養所が3月末で閉鎖になるというので家族オールスターでの温泉旅になった。

息子たち夫婦はここ米沢で友人と会食するというので、一旦分かれて私たち夫婦だけで米沢のランチ&探訪になる。

米沢と言えばもちろん米沢牛で、市内を車で走ったかぎりでは米沢牛を食べさせてくれる店がたくさんある。そんな多くの店の中で駅近くにある専門店「まるぶん」ですき焼きをいただく。息子夫婦の友人がここ米沢に住んでいて、その友人から聞いた店だからはずれはないと思っていたが、さすがに旨い。

固形燃料に火をつけてめいめいで料理するすき焼き鍋だが、固形燃料を2個使用しているので火力は充分だ。肉はたくさん、そして柔らかい。もちろん味付けも良いが、肉そのものの味が支配的なのは言うまでもない。期待以上のお勧めのグルメだ。



■上杉神社

米沢の街の真ん中には上杉神社がある。もともとは米沢城だったが、明治の初めに上杉謙信と上杉鷹山を祀って上杉神社となった。それが証拠にこの神社の敷地の周りを囲むように濠が残っている。いかにも人工的な形でほぼ正方形をしている。



上杉謙信といえば越後なのだが、謙信が亡くなり次の上杉景勝が豊臣秀吉の五大老になり上杉家は越後から会津に移った。石高は越後 40 万石から会津 120 万石なので加増、いわば大出世している。この時に家老の直江兼続が米沢 30 万石を任せられている。

ところが景勝は徳川家康に齒向い、関ヶ原の戦いの後に 30 万石に減らされてしまう。それはつまり米沢だけになったという訳で、直江兼続の米沢城に主君景勝が移ってきた。以後の米沢城は上杉家の居城になり、景勝を初代として上杉鷹山は 9 代目にあたる。

鷹山は名言「成せばなる、成さねばならぬ何事も、成らぬは人のなさぬなりけり」で藩政改革をした人で、ケネディ大統領が尊敬する政治家としてあげているほどの人物だ。

そのためこの神社には関わりの深い謙信、景勝、鷹山、兼続の碑や像がある。神聖な場所でもあるが市民の憩いの場所でもあり、適度の広さで市街地の中にあるので米沢観光の一つとして訪れるには良い場所だ。

さらに米沢城は伊達家が治めていた時もあり伊達正宗が生まれた城でもある。そして兼続が景勝に城を譲る時、鷹山の改革の背景や実態、さらに明治後期に鷹山が上杉神社から外される話まで含めると本一冊書けそうだ。一人の人物ではなく一つの場所を舞台に歴史を追うのも興味深い。

■出羽三山

出羽三山とは月山（1984m）、羽黒山（414m）、湯殿山（1504m）の総称で、古くから山岳信仰の聖地として栄えてきた。古くからとは6世紀とも言われているので1400年も前のことである。各山頂に神社があるが、それを束ねるように羽黒山に出羽三山神社が置かれている。

三山のそれぞれの役回りは、羽黒山が現世（正観世音菩薩＝観音浄土）、月山が前世（阿弥陀如来＝阿弥陀浄土）、湯殿山が来世（大日如来＝寂光浄土）になっている。

巡礼はまず羽黒山で現世利益を、月山で死後の体験、湯殿山で新しい生命で生まれ変わるというもので、その巡礼修行は三関三渡（さんかんさんど）と言われる。

ここで気が付く人もいるが神社なのに如来や菩薩という仏教用語が多用されている。

そう、この地は土着の山岳信仰と仏教が融合した神仏習合の典型的な場所だ。1200年以上も栄えたが、明治政府の神道重視政策による神仏分離令と廃仏毀釈運動（仏を廃止、釈迦の教えを壊す）のために表面上は神社になったのだろう。政治と宗教との関係は極めて複雑だ。

今回の旅では出羽三山には行かなかったが、数年前に出羽三山神社詣でをしている。下界にある出羽三山神社から山の中の参道を歩き、山の上にある出羽三山神社三神合祭殿に行ってきた。

参道は背の高い木々が道を上から守っているかのように生い茂っている。森の中だが信仰の山の独特な雰囲気があり、歩いていると気持ちが洗われる。途中には五重塔もひっそりと建っている。五重塔は存在感を見せながらも、決して山そのものよりも目立とうとはしないで謙虚にたたずんでいるように感じられる。



三神合祭殿の正面で拝礼すると、真ん中に月山神社、左右に羽黒山神社、湯殿山神社の名前が確認できる。

何故、羽黒山に行ったのか。

それは新聞社系列の旅行会社のセミナーに行ったのがきっかけで、セミナーの中で出羽三山の山岳信仰を月の満ち欠けと人間の生と死に照らして説明があり、その内容が強烈に印象に残ったからだ。

その旅行社では山形山岳信仰の専門家が案内するパック旅行を企画販売しており、費用としては普通に行くのに比べると3倍くらいする。しかしセミナーには多くの人が集まり人気があるから興味深い。

旅をする目的が歴史探訪や、知の欲求というように多様化していることを痛切に感じたのも覚えている。

■蔵王温泉の湯

蔵王温泉の泉質は強酸性の硫黄泉で、酸性度は極めて高い。水素イオン濃度（PH）は1.9で、人間の胃液が3~4なので胃液よりも強酸ということになる。強酸性ということは金属を腐食させ、細菌や雑菌を死滅させるが人間に対してはほとんど害がない。そのため外傷の治療に効果的と言われている。

硫黄泉というとよく聞くのが「卵が腐ったような匂い」という表現が使われるが、腐ったという表現があまり良い印象を与えない。私はこの匂いが好きなのであまりその表現は使わないようにしている。しかしこの匂いは伝えようがないのであえて出した。そして私はこの匂いが好きなのでここ蔵王温泉に毎年やってきている。

そして温泉街としては、あの有名な群馬の草津温泉と比較することができる。泉質はほぼ似たようなもので強酸性の硫黄泉だ。酸性度も同程度になっている。その他にも類似点があって、歴史的に古くから温泉場として栄えたことや、スキー場が隣接しウインタースポーツの大会会場になること、共同浴場が街の中にあり住民も観光客も容易に入浴出来る。

泉質や多くの点で似ているものの、どうもここ蔵王温泉は草津温泉ほどに元気がない。それは何故だろうか。

首都圏からのアクセスの差とか、考えられるが、私の勝手な発想で大きな違いをあえて言うと草津温泉のシンボルとして湯畑があるが、蔵王温泉にはそのようなものがない。草津温泉の湯畑はあの巨匠、岡本太郎がデザインしたもので街や住民がまとまる拠りどころになっているように思える。この功績が大きいのかもしれない。

街づくりの基本は住民の心をまとめる拠りどころ、シンボルが必要なのだ。

■ジンギスカン（成吉思汗）鍋発祥の地

蔵王温泉はジンギスカン鍋発祥の地とも言われている。確かに温泉街を歩いていると至るところにジンギスカン鍋の旗が立っている。私も何度かここでジンギスカン鍋を食べたことがある。

現状ではジンギスカン鍋は蔵王温泉よりも、北海道や札幌が有名だ。

一般的に発祥の地というのは諸説あるもので、岩手県遠野市や長野市でも自分たちの街がその起源だと主張している。この類の話は言ったもの勝ちという側面も多くある。

いろいろ調べてみると、ジンギスカン鍋の発祥の地は東京らしい。1936年（昭和11年）にジンギスカン料理専門店「成吉思荘」が開店した。そして同じ年に札幌の「横綱」という店にもジンギスカン鍋のメニューが登場している。

これに蔵王温泉の歴史を重ねてみる。蔵王温泉は110年頃に発見された古いもので、高湯と呼ばれていた。転機は1950年（昭和25年）毎日新聞社主催の新日本観光地百選の公募に対し、地元民が葉書運動を展開し山岳部門で1位になった。これを受けて地元は熱狂し、村の名前も温泉名も蔵王に改称したという。

つまり山奥の湯治場だった温泉地が1950年を契機に発展を始め、その一手段としてジンギスカン鍋を使ったのだろうと推測できる。それよりも14年早く東京や札幌でジンギスカン鍋が登場しており、その期間には太平洋戦争という大きな出来事も発生している。

羊の肉を焼くだけの料理は誰でも考えられるので、全国至るところで起源があってもおかしくない。だから私はその名前に注目する。

これも諸説あるが、命名したのは駒井徳三という人で1932年（昭和7年）の満州国建国に深くかかわった人物だという。そしてその名前は源義経が北海道からモンゴルに渡ってジンギスカンになったという義経=ジンギスカン説からきたものと言われている。

これは余談だが、私は友人から「成吉思汗の秘密」という本を強く勧められ、凄い勢いで読み終えて感動したことを思い出した。それは小説だが、源義経は平泉で亡くならず北に逃げて北海道経由で大陸に渡りジンギスカンになったことを裏付ける検証を行うストーリー展開で、東北北部や北海道のいろいろな場所でその痕跡が残っているという。

駒井徳三は日本の希代の英雄である源義経がジンギスカンになっていて欲しいという思いを持って、あの羊の肉の料理にこの名前を付けたのだろうと私は思う。

残念ながら蔵王温泉は平泉から100km以上南にある。義経が逃げた方向ではない。むしろ平泉の北に位置する岩手県東野市や北海道や札幌の方が駒井徳三の思いに沿っている。

ジンギスカン鍋という名前が全国的に有名になってから、羊の肉を鉄板で焼く料理はこの村でも古くからやっていたという主張ならば十分に理解できる。

■こんにやく（蒟蒻）の里

蔵王温泉近くの上山（かみのやま）市の樽下宿に「こんにやく番所」という、こんにやく専門の料理屋がある。

地球一周クルーズで知り合った地元のSさん夫妻とここで一緒に昼食をとる。もちろん夫妻がこの店をよく知っていて是非紹介したいという気持ちがあったのだろう。

蒟蒻を使用した懐石料理とでもいうようなもので、先付、前菜、造り、煮物、酢の物、揚げ物、食事というコースで提供される。凄いのはこれらの全てが蒟蒻でできていることで、例えば揚げ物は数の子に似せた味と食感にした蒟蒻で、食事はお粥か蕎麦を選べるが、これらも当然蒟蒻でそしてどちらも見事なまでに似ている。いや言われないとわからないかもしれない。



蒟蒻は低カロリーなので、健康志向には良いだろう。これは一見、いや一食の価値がある。

蒟蒻と言えば群馬の名産で元群馬県民の私としては気がかりになり店の人に聞いたところ、蒟蒻の生産量は群馬県がダントツ一位だが、消費量は山形県が一位だそうだ。

そうかそうかと何故かホッとする。

■そば処

翌日の昼食もまた、Sさん夫妻に誘われ山形市内の「あづまや」という蕎麦（だったん）そばの店に行く。

蕎麦そばは、ルチンという成分を多く含んでいる。ルチンには毛細血管の強化や動脈硬化の予防、脳卒中の予防に効果があり、血圧降下の作用もあるという。そのルチンの含有量が普通のそばの約120倍というから凄い。独特な苦みがあるために苦蕎麦（にがそば）とも呼ばれている。

食べた限りでは苦みは気にするほどない。体に良ければ大歓迎だ。



そういえば、以前に月山の南にある月山湖の近くのドライブインで山菜そばを食べたことがあるが、とても印象的だったことを思い出した。



醤油味の山菜を煮込んだ大きな鍋がコンロに乗って出てきた。煮込みのそばかと思っただが、そばは別の皿が出てきて、つけ麺で食べるユニークなものだ。

これがなかなか美味しかった。

それから山形は紅花そばでも有名だ。紅花が練り込んであるので赤というよりピンク色のそばで、珍しさも手伝って旨い。

板そば、もある。板で出来た大きめの器に数人前のそばを盛りつけた、山形独特のものだ。

山形は蕎麦王国と言われているようで複数の蕎麦街道があるという。だから山形のそばの特徴は、様々な種類のおそばがいろんなそば屋で食べられるということらしい。

蕎麦は土地が痩せている場所でも比較的良く育つので、山の多い長野県や山形県には持ってこいの作物なのだろう。だからここ山形県は蕎麦の名店が多い。

■山形市の定番

山形といえば芋煮が有名で、毎年9月には山形市内の河川敷で直径6mの大鍋で大芋煮会が開かれる。残念ながら私はこの大会に参加したことがないので多くは語れないが、会場予定地には大きな鍋がいつも置かれている。



ここにレシピも記載されていて里芋 3t、牛肉 1.2t、ネギ 3500本、蒟蒻 3500枚、醤油 700l、日本酒 35升、砂糖 200kg、水 6tとなっている。これが何人前かということと3万人分ともいわれている。

一度は行ってみたいと常々思っているがなかなか実現していない。芋煮は市内の料理屋で一年中食べられるので、9月に限らずこの郷土料理を堪能することは出来る。

そして山形市内には山寺もある。松尾芭蕉が1689年に詠んだ句「閑さや岩にしみ入る蟬の声」で有名な寺だ。JR山寺駅前にあり、山全体がお寺だ。頂上までの各所にお堂に建っている。そこから下界を眺めるのは爽快だ。

この寺は平安初期860年に比叡山延暦寺の別院として創建された。仏教における寺とは、本来は修行の場なので必ず修行する山がある。だから宝珠山立石寺が正式名称になっている。

その修行というのを心と体で感じながら、1015段の階段を登る。途中、松尾芭蕉の句を思い浮かべ江戸時代の旅を想像することがこの寺の参拝の仕方だと、私は参観するたびに思っている。



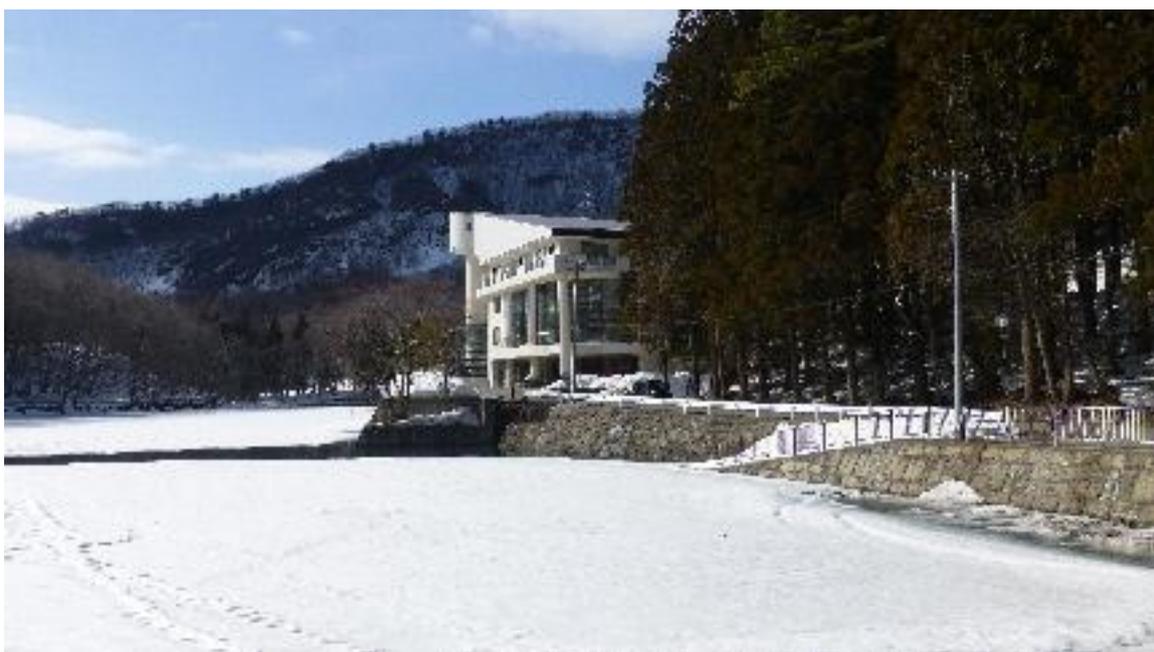
第二章 企業保養所の時代

■保養所の閉鎖

その昔、蔵王温泉には100軒ほどの企業保養所があったという。それが2年くらい前に聞いたら4軒になってしまったという。そしてこの3月末をもって私が勤めていた電気メーカーも蔵王の保養所を閉鎖するという。

私はこの蔵王の保養所が好きで毎年2回くらいやって来て、4~5日間くらい滞在していた。安価で泊まれてあまり気を使わないで過ごせる宿なので、温泉湯治の側面も加えたリゾートで訪れていた。閉鎖は残念ではない。

もはや企業保養所は時代的な役割は終えて、次の時代が変わってきているのだろう。



■「うちの会社」

保養所以外に会社の行事として、かつてはいろいろなものがあった。社員旅行はもとより、家族まるごと楽しめる運動会、観劇会もあった。



私たち家族も会社の労働組合が主催する10日間の韓国・中国の外洋クルーズに行ったことがある。

その時の出港シーンは忘れられない。物凄い数の紙テープが投げられ、盛大な出航式になった。

そういうイベントだけではなく生活そのものも会社が提供していた。あるいは今も提供している。住む家つまり社宅、学校や病院まで持っている大企業も珍しくない。

企業は従業員とその家族に対する福利厚生を充実させることで、従業員や家族まるごと会社に対する帰属意識、忠誠心が高めることが出来る。従業員側にしてみれば安心・安全・安価という恩恵にあずかることができた。「うちの会社」はすごいだろうという優越感のようなものも感じられる。

「うちの会社」という表現をそのまま英語訳すると、**my company**になる。私はその昔、外国人との会話でこの言葉を使ったら、「あなたは経営者ですか？」と言われたことがある。すぐに「私が勤めている会社」と言い換えたが、非常に驚いたことを覚えている。つまり欧米では経営者でない従業員が **my company** と言うことはあり得ない。

経営の神様、松下幸之助の経営哲学の中に社員稼業という言葉がある。どんな大きな会社でも自分は歯車の一つではなく、その仕事を任された経営者意識を持ってというものだ。そこに接客やモノづくりに責任感や創意工夫が生まれるからである。

イベントや生活環境まで企業が面倒を見るような会社は「うちの会社」という意識になる。

■ リストラ

企業と従業員の双方にメリットのある **Win-Win** の関係は高度成長期にはほぼ確立してバブル期を迎えて絶頂期に達する。そしてバブル崩壊やリーマンショックによって企業経営は大きな転換期を迎える。

企業に資金の余裕が無くなり、福利厚生予算が削られていく。リストラの名のもとに人員整理が行われ、終身雇用が崩れていく。

本来リストラとはリストラクチャリング (**restructuring**) のことで再構築を意味する前向きの言葉で、決して人員整理ではない。ソビエト連邦の崩壊の頃にペレストロイカという言葉が流行ったが、ペレは再でストロイカが構築だ。語源は同じで再構築を意味する。

おっと、話がそれた。

終身雇用が崩れると従業員にとって生活の全てだった会社は生活の一部になりお金を稼ぐ一つの手段に化す。ここで新しい関係が構築される。

そうか、これこそが再構築でリストラなのか。うまく繋がった感がある。

企業側の原因だけではなく、旅館やホテル、旅行業界もサービスの転換を図ったのも大きい。安い宿、安いパック旅行などが企業努力によって提供され始めた。企業努力というと聞こえも良いが必要に迫られた生き残りをかけたサービスかもしれない。

日本という国が製造業を主体とする第二次産業の国からサービス業を主体とする第三次産業の国に変化していることも分かる。それは当然、交通網の発達やインターネットという情報通信革命も手伝っている。

■ 保養所は復活しないのか

企業の有り方が変わってきたのは確かで、企業は従業員と顧客のためのものという考え方から社会や株主のものというように変化している。従って今後は一部の中小企業は別として、企業が

従業員や家族まるごと面倒見るようなことを今後はないだろう。

従業員の側も変わってきている。転職も当たり前の時代で、福利厚生は勤める会社に頼らずとも安価な宿や旅行は自分で探すことができる。

そんな中、各企業の福利厚生を一手に引き受ける企業が出てきた。保養所などの従業員の福利厚生を専門に行うサービスを、依頼した企業の従業員に提供するという形態になっている。保養所は、保有する施設または提携する施設になる。

依頼する各企業は自分たちの本業に専念でき、従業員に福利厚生を提供できる。

従業員にとっても福利厚生を専業としたサービスなので宿泊や旅行だけでなくグルメ、カルチャー、レンタル等と相当に幅が広い福利厚生サービスを受けられる。

そういう意味において企業保養所は形を変えて存在するに違いない。ただ、「私の会社」という思い入れはないかも知れない。

蔵王温泉、最後の保養所の旅は様々なことを考える良い旅になった。

実施は 2018 年 3 月 18 日～21 日、澄みきった空気と青空が広がる 4 日間だった。